



十一月の俳句

(2020年11月)



た べ も の 俳 句	モ ー ロ ク 俳 句	歳 時 記 俳 句	目 次
13 〈	8 〈	1 〈	

11月の和名は「霜月」。霜が降り始める頃という意味があります。暦の上で冬の始まりとされる二十四節気の「立冬」を過ぎると、暖かな小春日和と寒い日を繰り返しながら、寒さが深まります。冷たい風に落ち葉が舞い、虫や動物たちが冬眠に入るのもこの頃。冬の訪れを感じさせます。

11月の行事は、秋の収穫を祝い感謝する酉の市（とりのいち）や亥の子（いのこ）祝い、毎年11月23日に宮中や全国の神社で行われる新嘗祭（にいなめさい）などがあります。

（宇佐美保幸）メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに

巣鴨とげぬき徒然俳句

<https://blog-haiku.777usami.com>

あたゝかき十一月に感謝して
寺尾聰曇りガラスに冬が来る
冬来る曇りガラスの風の街

初冬や小さき庭の手入れして
くしゃみして初冬の月の明るさに

災害が無きこと祈り柿すだれ

冬に入るヒートテックはまだ早し

交番は何時も無人で冬に入る

約束を反故にしたまま冬に入る

河川敷誰かのスラム冬に入る

冬に入り真夏の疲れまだ残り

考えて考え抜いて冬に入る

無駄なことブログに書いて冬となる

イルミネーションニュースのたびに冬が来る



小春日にみたらし団子妻と喰ふ
小春日やキラリと光るイヤリング
小春日や歩行器押してポストまで

神の旅キャツシユレスなど無縁かな
お守りもお布施に軽重神の留守

花柵隠れて咲いてこぼれけり
床の間に男葛の赤き実が
たくましき野菊の花は東京に
磯菊や海風に耐ゆる崖の上

テレビまた同じニュースに湯ざめかな
せっかちは速き床屋で都鳥
ゆりかもめスマホ仕舞って音楽も
縄跳びや五十人もが息そろえ



銀杏落葉乾いた後の行き先は
散る銀杏焦げたチーズの匂いあり
昼どきやサラリーマンが黄葉踏む

熊手には相も変わらず鯛小判

それではと言ってそのまま石露の花
何言わず静かに咲いて石露の花

何もかも隠すことなく花八つ手
八手の花生きる力を見習って
ごつごつと見栄え気にせず花八手

穂を広げススキ山肌真つ白に
薄野で大事なものを忘れけり
ふくろうはふくらんでまたふくらんで

落ちてまで大きき競う朴落葉



転がつて角がなくなる落葉かな
とめどなく落葉の中に溺れたり

初時雨街のけがれを消すごとく
しぐるるや職質受けて緊張す
しぐるるや団地のバスの停留所

方丈に読経が流れ時雨かな
時雨来て韓国ドラマ妻飽きず
石仏も我も苔むし片時雨

冬薔薇けなげに赤を主張す
冬薔薇の真っ赤は愛か失恋か
冬薔薇よ話すことなど何もなし

人生に笑顔大事に返り花
目的は何かと問うて返り花
無理矢理に誰が咲かせた返り花



何故なのか木枯らし一号早まりて
木枯し一号道路の落ち葉掃除する

寒冷前線女のまつげ伸びている

丁寧に生きて一生冬桜

こじつけて愚痴の多くは冬の雨
国会中継無駄な時間の冬の雨

エロスなるウイスキー買ひ冬支度
冬眠のためのユニクロまとめ買い

ただ空を飛んでいたいと紅葉散る
ライトアップ色めく紅葉夜の闇

コンビニのスイーツ誘惑冬うらら
影伸びて我立ちすくむ冬の夕
東京の水道の水冷えてきて



サクサクと踏む音軽く霜柱
ふとまぶしかがやかせたる霜柱

冬の蠅おのれの影を重ね見る
窓を開け空気入れ替え落葉入る

紅葉して社説むなしきリベラルや
GOTO に無縁に生きて落ち葉風





モーロク俳句

モーロクし十一月のむなしさや
十一月モーロクすれどカフエテラス

小春日やモーロクすれば欠伸のみ
モーロクしともかく眠き小春日や
小春日や私モーロクノーテンキ

文化の日私モーロクノーテンキ
文化の日火星人もモーロクす

短日やモーロクしても日課あり
短日やモーロクすればまた忘れ

モーロクしパンを焦がして初時雨
モーロクししぐるる中に散歩する



考えているとモーロク片時雨
モーロクし見知らぬ花も時雨れけり

モーロクし鯛焼き一匹持て余す
世を去りし我もモーロク隙間風

モーロクし帳尻合わせ冬に入る
モーロクしほとほといふ冬に入る
モーロクし移動能力冬に入る
モーロクし背骨じんじん冬に入る
モーロクし空を見上げる日に冬
モーロクし鼻毛が伸びて冬が来た
冬立てりモーロク扉開くごと

冬ぬくきことも不安にモーロクし
モーロクし医者と仲良し冬暖か

モーロクし咲いて淋しき花八ツ手



モーロクは音もなく来る花八つ手
モーロクし冷淡となり花八手
モーロクし泣き言多く花八手

モーロクし何を準備か冬初め
鼻すする初冬の月やモーロクし
肩肘を張ってモーロク冬はじめ

山茶花やモーロクすれば機嫌よく
人に倦みモーロク進み冬来たる
冬の蠅モーロクしたかよたよたと

神の留守モーロクすれば不安なり
モーロクの青空むなし神の留守
留守の神つれづれぐさにモーロクし
八百万どこでもドアで神の旅

モーロクしこじつけ多くは冬の雨



モーロクしざれごと多く冬の雨

モーロクしまなざしふやけ枇杷の花
枯菊や時間が吾もモーロクす

モーロクし木枯らしの日のありどころ

木枯らしや多くを忘れモーロクす

モーロクし釣瓶落しの中にあり

モーロクし小さく眠る枯野かな

モーロクし音に影ある枯野かな

冬枯のすすみゆくごとモーロクす

モーロクし慌ただしくも柿紅葉

モーロクし何を手放す柿紅葉

モーロクしふと考える一葉忌

からまって落葉と風とモーロクが

モーロクし何に怒りて落葉蹴る



モーロクし心に舞うは落葉かな
モーロクし心ゆるめば落葉かな
落葉踏む夜の暗さにモーロクし

蓮根の穴を数えてモーロクす
モーロクし小庭を彷徨冬の薔薇
モーロクし抗う為の寝酒哉

茶の花やモーロクしても未練あり
雑炊がモーロク胃袋癒やしけり
霜降りの自愛それのみモーロクし
モーロクし鼻をいじくり霜夜かな

セーターの毛玉取りつつモーロクし
モーロクし寒さ寂しさ意思疎通
北風に生きる迷いをモーロクし
モーロクし逃げ道少なく草は実に



たべもの俳句

神迎えすいとん供えお相伴

神無月豆腐温め酒を酌む
ドーナツを手土産にして神の旅

初時雨カリカリ焦がした目玉焼き

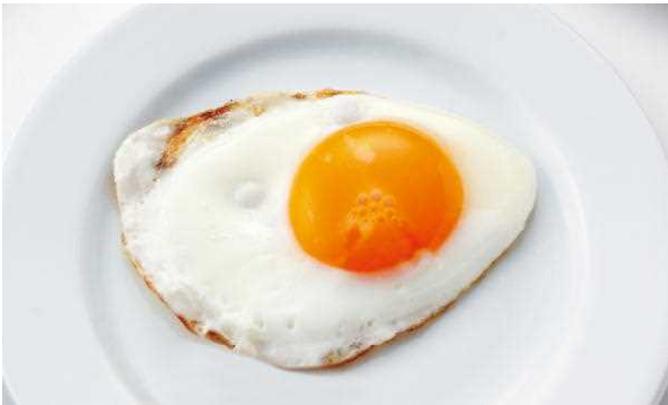
すき焼きは日本文化文化の日
文化の日トルトカレーの夕ご飯

朝寒にベーコン焼いて目玉焼き

時雨忌のカレーうどんがシャツ汚し

時雨るるや今日もお昼はカップ麺
じつくりとぐつぐつシチュー時雨来る
朝時雨キウイフルーツ朝食に

冷凍のたこ焼きチンして小春かな



小春日や期限確かめ生卵
立冬のホットサンドにスープ添え

海鼠喰う哲学者いて何話す
朝食にやはり塩鮭この塩気
人參はカレーの中でも自己主張
人參はずんぐりむっくりそれがよい

紅葉見て力うどんを京都にて
ずわい蟹園児親しむ「かに集会」
厚切りのマグロの刺身沼津港
厚揚げを焼きマヨと七味冬の朝

干し柿は風に吹かれて熟成し
干柿は昭和も今も甘かりし

鯖缶のカレーを作り冬に入る
鯖缶をばっばと開けて寒鴉



鯖缶の値上がり続く悲鳴あり

自家製の千枚漬けや厚みあり
とんかつにやはり千切り冬キャベツ
きんぴらとなつて牛蒡も安心す

道徳心社内に匂う肉まんや
デパートで肉まん買って冬に入る
肉まんやソースを垂らしソース顔

鯛焼きとあなたを食べて腹ふくる
鯛焼きの腹が膨れて子持ちかな
鯛焼きはどこから食べる哲学者
鯛焼きは鯛の味せずまがいもの
歳とれば鯛焼き一匹持て余す
鯛焼きや麻布十番はるばると
鯛焼きのあんのはみ出る冬が来る
鯛焼きを二つに分ける難しき



この葱を成仏させよ焼いて食ふ
白葱を焼いて熱々残酷に
葱買いにゆくだけのこと直売所
泥葱を冷たき水で白くする
シヨパンかけ葱刻む音合奏す

野沢菜を刻みラーメントッピング

ざざむしも佃煮にする日本人
ざざ虫を肴に晩酌吟醸酒

柚味噌のレシピ確認柚五つ

「潮かつお」伊豆に正月待つ風も
短日や焼き鳥匂へる商店街
木枯らしやカレーを煮込む湯気立てて
木枯らしやぶっかけうどん大盛りで



湯豆腐は我が来し方のごとくなり
湯豆腐の豆腐を選ぶデパートへ

チンしてホット牛乳冬来たる
冬近く夜はみかんと哲学書
みかん剥き二つに割って二人して



